

なかよくする子どもを育てる

生かされて生きていることに感謝のこころが芽生え、互いに助け合って生活することのよるこびや心地よさを味わう。

春の足音が近づきました。ご卒園、ご進級おめでとうございます。

私たちの園では、園生活最後の発表会に、これまで一年間取り組んできた各クラスの活動や楽しかった遊びを盛り込んで創作劇を作り、発表しています。クラスごとに子どもたちで話し合い、脚本から替え歌の歌詞、ダンスの振り付け、大道具から背景に至るまで、子ども自身で創作します。飾らない、クラスの日常の風景がそのまま舞台に出るように、担任は子どもたちを補助する側に回り、子どもたち主導で取り組みを進めています。大人から見れば脈絡のない筋立てだったり、意味の通らない台詞だったりしますが、独創的で、創意あふれる劇の制作を、なにより子どもたち自身が楽しんでる様子が見られます。

この創作劇とともに、もう一つ、私たちがとても大切にしている発表会の取り組みがあります。それが、「ピカドンたけやぶ」という絵本を題材にしたミュージカルです。この絵本は、原爆投下直後の広島で、わずかに焼け残った竹やぶが、ひどい怪我をした人たちの救護場所となったという実話をもとに、広島の絵本作家はらみちをさんが書かれました。

被爆都市広島に生まれ育つ子どもたちに、この町の悲しい記憶を伝え、平和への願いを語り継いでいきたい。そんな思いから、園では原爆を描いた絵本の読み聞かせや、平和劇への取り組みを、開園当初から続けています。なかでも「ピカドンたけやぶ」は子どもたちにも親しみやすいお話であったことから、脚本家の小田健也先生と作曲家の藤村記一郎先生に依頼し、ミュージカル作品に仕上げていただきました。以来四十年、竹やぶの竹一本一本が主役のこのミュージカルを演じて卒園するのが、私たちの園の習わしになっています。全国の親子劇場でも、多くの劇団がこの作品に取り組んでいらっしゃるそうです。

♪ピカピカ つやつや ドンドンドンと
空に向かってのびている 風にゆらゆら揺れている

悲惨な原爆を、生き残った広島の人々は「ピカドン」と呼び、語り継いできました。その言葉は、ミュージカルの中では「ピカピカでツヤツヤでドンドン伸びるたけやぶ」と読みかえられて表現されています。恐れや悲しみの底から、希望を抱いて立ち上がろうとする広島の人々の姿が、子どもたちの演じる竹やぶに重なります。

♪死んじやだめ 死んじやだめ がんばって がんばって
ほくたちがすぐに日かげを作ってあげる ほくたちがいのちの風を送ってあげる
だから君も死んじやだめ

子どもたちは竹やぶになりきり、やけどを負って運ばれたカズユキ少年のいのちを助けようと、懸命に手を伸ばして風を送り、声のかぎりに歌います。この時ばかりは、日ごろのどんな意見の違いも越えて、子どもたちの心は一つになります。ひとつのいのちが、多くのものの関わり合いの中に生かされていることを、歌声の中に感じるひとときです。

♪ザワザワザワワ ザワザワザワワ
さあ ほくたちがあたらしいのちをあげよう

核廃絶への道のりは遠く、世界は今なお核の脅威の中に息をひそめています。子どもたちの心を通して、命を尊ぶ心が世界へと広がっていくよう願うばかりです。

教育原理委員会 宮武紗和子